

インタビュー映像は、計4本で構成されています。

今回は3本目です。

インタビューアーは、日本財団ボランティアサポートセンタースタッフの山田。

お答えいただくのは、聴覚障害者の皆川さん（紺のシャツを着ており、髪を後ろに結んでいる20代の女性）です。皆川さんは、日本にいるとき看護師として働き、現在、アメリカのギャローデット大学に留学中。

この映像でのインタビューのテーマは、アメリカのマスク事情と、マスクによるコミュニケーションのしづらさについてです。

画面情報

山田と手話通訳者が映る。

山田が日本語で話し、手話通訳者が日本手話へ通訳をしている。

今のコロナの状況において、日本だとマスクをすることが一般的ですが、アメリカでも、皆さんマスクされていますか？

皆川さんが手話で話す。皆川さんの手話は手話通訳が音声日本語へ通訳している。

アメリカは州によってマスク装用に関する法律が違うんです。私が暮らしている州では皆マスクをしなければいけないという法律がこの4月にできました。ですから皆さんマスクをするよう注意してします。ただ他の州ではマスク義務の法律がないところもあり、気にしていない人もいます。州によってかなり違いますね。でも私が住んでいる地域では皆さんマスクをしています。

山田

日本で話題になったのですが、手話通訳の方がマスクをすると表情が読みにくいという話が出てました。今ではマスクを外して、フェイスガードとかあとは板を置くとかで表情を見せるということが一般的になっているんですけど、マスクをしていると表情が伝わりにくいってというのはありますか？

皆川

マスクのあり・なしで比べてみると確かにそうですね。

でも手話は口の形だけ見て読み取っている訳ではありません。手の動き、肩の動き、目や眉の動きなど全て合わせて手話として話を読み取っています。確かにマスクをしていると口が見えない分、情報量が減ってしまう部分があります。でもものすごく大きく減ってしまう訳ではありませんけどね。

ろう者同士であれば、マスクをしたまま手話で会話をして、通じ合うことができます。でもやはり公の場で、国や県の情報を伝える手話通訳はたくさんの方が見るものですから、透明マスクを使って口の動きを見せ、目や眉、肩や手の動きもあわせた十分な情報量で伝えられるようにできると確かに良いですね。

山田

もし日常の中でコミュニケーション取る時に、友人がマスクをしていたという時に、なかなかそのマスクを取ってくれということにはならないと思うんですけど、そういう時こそ、さきほど話していた引き出しを使って、それ以外のコミュニケーションでとって行く感じですか？

皆川

そうですね。マスクをしていて口の読み取りができない場合は、筆談したり、音声認識アプリを使ったりすることができますよね。ただアプリは飛沫がスマホに飛ぶから、やめた方が良かな・・・。とにかく身振りでもなんでも色んな引き出しを駆使していくことが必要だと思います。

あ、あの・・・それと、口の形を読むことについてですが、これは情報としては一部分です。でもろう者の中には特に口の形を読んでコミュニケーションをしている人もいます。その場合、マスクが大きな壁になってしまいます。他の情報では読み取ることができない人もいます。ろう者だったら皆同じという訳ではありません。口の形が見えないことで、困っている人もいます。

山田

なるほど。本当にやはりその人その人にコミュニケーションを取って、一番伝わる方法をお互いに考えていくって言うのが大切なんですね。

ここで3本目のインタビュー映像が終わります。

4本目のテーマは、オリンピック・パラリンピックで活動するボランティアへのメッセージをいただいております。

ぜひご覧ください。